

理事長挨拶



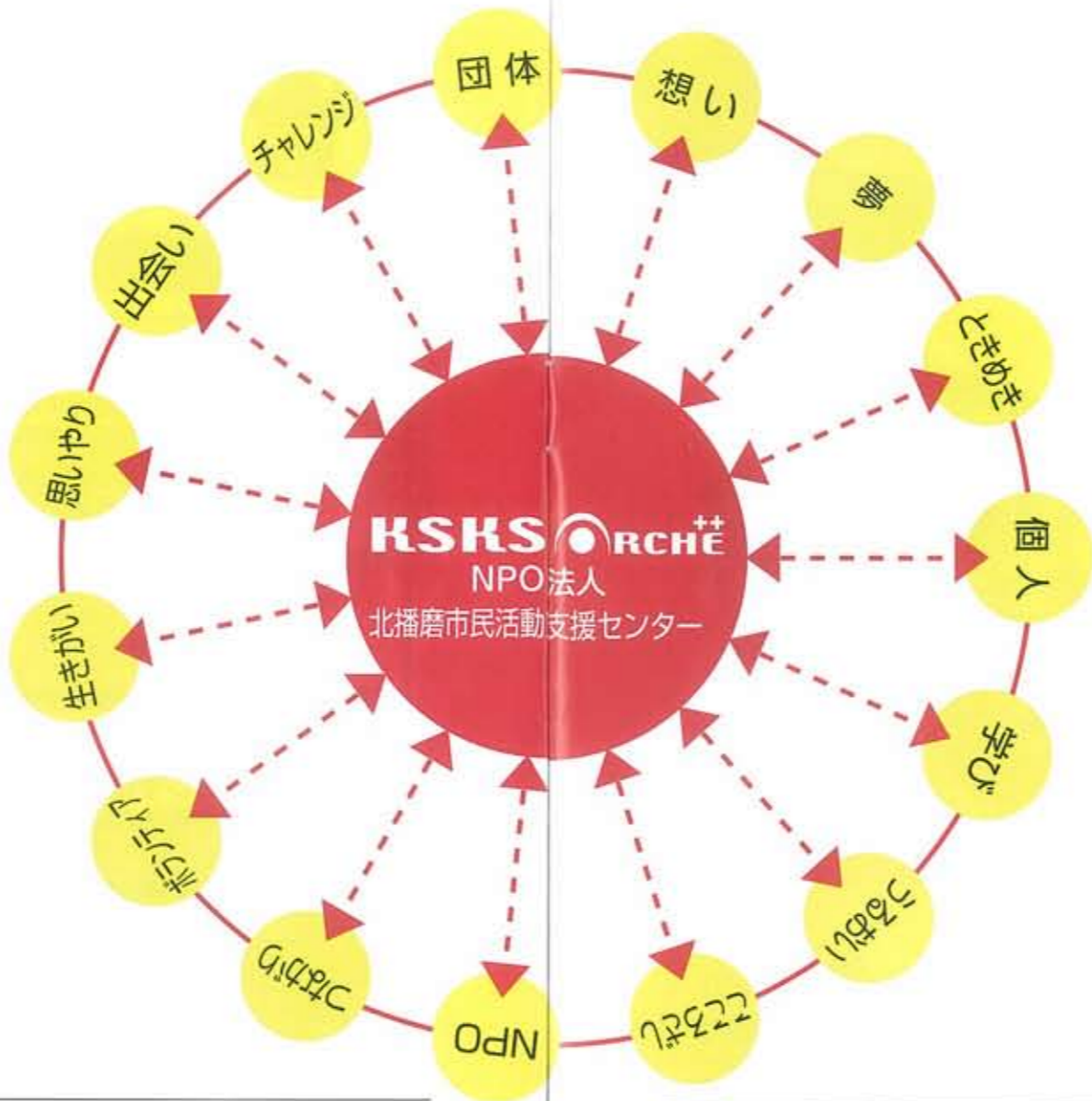
柳田吉亮 (やなぎた よしひろ)

私たち「NPO法人北播磨市民活動支援センター」は、北播磨地域の公設民営のNPO中間支援組織として、昨年七月二十日の設立総会をもって誕生。十二月二十二日に県の認可をいただき、同月二十四日にNPO法人としての登記を完了いたしました。中間支援組織とは、多種多様な市民活動団体や団体を設立しようとする個人に対する支援を行い、その活動の活性化を推進することを目的として設立された団体のことです。

私たちが、小野市の支援をいただいて誕生しましたが、管理運営はすべて民間にゆだねられています。しかも市民活動は、行政区分を越えて連携できてこそ、より活性化が図られるとの考えで、北播磨の名称が採用されました。もちろん、設立発起人も北播磨全域に及んでいます。

この組織は、小野市行政が主体となって、三年ほど前から構想され始めましたが、おりしも同時期に計画された「小野市うるおい交流館」と目的を共有するため、その管理運営のすべてをになうことになりました。公的な施設をNPO法人が管理するケースは、全国各地で見られますが、管理運営全般となると極めてまれな事例で、本格的な運営が始まる頃には、全国の注目を浴びることになるでしょう。

私たちの存在意義は、この「参画と協働」を実践できる自立した市民活動団体の育成にあり、これは、まさに時代の要求でもあります。私たちのような中間支援団体が、都市部を中心に全国各地で誕生してはいますが、私たちに、地方行政の構造改革の旗手としての活躍が、期待されています。皆様方のご理解とご支援ご協力とともに積極的な「参画と協働」をよろしくお願いたします。



一緒に感動して、く地域を目指して



品田充儀 (しなだ みつき)

「一生感動一生青春」、相田みつをさんの本のタイトルである。なんだかこそばゆくなってくるような題名ではあるが、考えてみると、確かに年々物事に感動することがなくなっているような気がする。歳を経るほどに、たいていのことについては予想がついてしまいい、たまに変わったことが起こっても「まあそんなものか」と流してしまふ。物事に感動する自分を維持するといふのは、案外難しいことなのかもしれない。

情報化は、人から感動を奪う。テレビやインターネットから溢れてくる情報の洪水は、もはや相当に刺激的なものでなければ人の目を引くものとはならない。地震、戦争、テロ。刺激を求める人間は、これらがエキセントリックに伝えられることにより、さらに過激な情報を求めるようになる。臨場感あふれる映像や音声の流れれば、くれば、くほど、そこで何が起きているのかという想像力を失わせてしまいかつていつてしまふように感じる。

このように考えると、NPO法人北播磨市民活動支援センター(ksk s)の最大の使命は、住民の皆さんに感動を与えつづけることなのかもしれないと思う。人と人の関係

は、バーチャルでもなく、また実感の湧かない遠い世界のことでもない。楽しくもありまた苦々しさを感じることもある人との付き合いは、良くも悪くも感情を揺さぶる。また、たとえば芸術といった知ることのなかった世界への誘い(いざな)いは、人に夢や生き甲斐を与えることになるかもしれない。会うはずもない人との出会い、自分の過去の人生からはおよそ考えられないような出来事、人のために何かをやってみるといふ冒険など、実はほんの少し殻を破ってみれば感動の機会などたくさんある。先日ある同僚と話をしていたら、「自分は定年までに死にたい」という。勉強一筋で、研究室と自宅との往復しか知らない彼は、定年になってやることや行く所がなくなることを今から恐れているのである。自分の殻を破るためには、誰かの手助けが必要なのかもしれない。

私たちに對する行政の期待は、本来の設立目的であるNPO中間支援団体としての活動は、いまでもなく、その活動拠点としての館の管理運営とともに行政業務のアウトソーシングの受け皿としての機能があります。そしてその背景には、「少子高齢化社会」の到来が大きな要素としてあるのです。

地域に暮らし働く人々の生きがいや、やりがいは、時代の流れとともに多様な様相を呈し、多種多様な市民活動の原動力となつていきます。高齢化社会の到来は、この傾向をいっそう強めることになり、ますます生涯学習の必要性が叫ばれるようになってきました。その結果、行政の市民活動に対する支援拡大の期待は、大きくなる一方です。